

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Nicolaus Herman Shombe
出身地：タンザニア・キリマンジャロ
所属：財務省・政策分析部
日本滞在：2007年10月～2008年3月

日本人は冷淡か？

ニコラス・ハーマン・シヨンベ

修士号取得のために来日したが、それ以前は日本について違った印象をもっていた。日本は先進国であり、生活のあらゆる場面で先進技術が垣間見られることはすでに知っていた。私は他の外国人が経験した文化的相違も見聞きしていた。どこに行くべきか、何を食べきか何も分からないだろうし、誰も私を理解してくれないだろうと思っていた。そのようななか、この研究の機会を私は得てしまったのであった。

来日して一カ月間は大変な目であった。特に言葉の壁におつかり、日本の生活習慣、食べ物にもなかなか慣れなかった。私はずつ状態になりかけてしまい、この状況下で単純な問題でさえ容易に解決できなかつた。私の期待と日本での実体験との相違により、私が日本にいること自体、場違いな気がしてしまっていた。

驚くほどの人でごった返した鉄道の駅では、行きたい方向にいかに進めばよいのか考え込んだことを覚えている。そこでは前に進むことさえ不可能にも思えた。地下鉄を利用することに慣れても、どこに行くにも地下鉄路線図を常時携帯する必要があった。だが幸い、大規模な駅で見受けられる表示板には英語、日本語が並記されており、車内では両言語のアナウンスも流れていた。

日本人との意思疎通も大問題であった。来日初期の頃、友人と私はスーパー、コンビニ、レストランで言葉の壁を感じた。商品には日本語のみが表示されており、尋ねられる人が誰も見当たらなかったため、必要としていた砂糖のかわりに塩を購入してしまったことを覚えている。塩辛い紅茶を飲んでしまったときはもう手遅れだった。

外国人の意見として、日本人は物静かすぎるくらいで、不親切であると思われる。私の国では知らない者同士でも、バスや通りで出会う人々と会話ができる。一方日本では、誰もが自分自身のこと、例えば、漫画を読んだり、音楽を聴いたり、携帯電話でゲームをしたりと忙しない。ところが後に、日本人は親しみがあがり、協力的であることが分かった。会話をスタートさせる必要があったのだ。外国人と話しながらいない人が多いようだが、「すみません」といった片言の日本語でも、彼らの親身な受け答えがあったことには驚嘆させられてしまった。

私の人生で忘れたいことは、日本人の信頼性の度合いである。ある日、友人と私が出食した際に、書類とお金の入ったポーチをどこかに置き忘れてしまったことにその持ち主である友人が気づいた。不思議なことに三〇分後、中身が何も無くなってい

ない状態でそのポーチを交番で発見できた。この体験は奇妙なことであったけれども、日本人がとても誠実であることを物語っているようだ。

日本の一地域だけではなく、大阪や京都といった場所も私は訪れることができた。様々な体験もできた。沖縄県のある島にある、日本人家族の家でホームステイをする機会があった。日本文化を良く知ることができ、素晴らしい時を過ごせた。一地域の体験だけでは、その国全体を特徴づけることは難しいと言える。東京で聞くような標準語とはかなり異なつた、独特な方言がこの島では話されている。

新しい文化のあらゆる面を吸収しようと努めたため、時が経つにつれここでの生活を楽しめるようになった。寿司やしゃぶしゃぶといった日本食に慣れ、琴のような伝統的な音楽も楽しく傾聴できるようになった。日本人は自分の殻に閉じこもる傾向がある一方で、親しみやすさもある。彼らの生活習慣に慣れてしまえば、ここでの生活は楽だ。

お話ししたい興味深い体験はまだありますが、掲載スペースが限られているため、それは私の心の引き出しにしまっておきたい。
(前インタビュー生/訳 梶山貴史)